資料

# 西田幾多郎・全集未収載遺稿（四）

## 六　学者としてのラッスル(ママ)

ラッスル氏が先日入洛の際、山本氏の招待によつて、京大の人々の中に混つて、私も同氏に逢ふことを得た。今度改造社から私に氏の印象記を書けと云ふのであるが、私は不十分の英語で多少の話をした位のことで、印象記を書く様な鋭さと器用さとを有たないのを遺憾とする。唯ラッスルといふ人は社会改造を唱へる人であるから、街頭に立つ志士風な所もある人かと思つてゐたが、おちついた学者風の人で何だか「プリンチピヤ・マテマチカ」が氏の本質らしくも思はれた。無論子房は容貌婦人の如しといふから何とも分らないが。

私はラッスル氏の著述をさう読んで居るわけでもないが、二三の書を読んだ所から、学者としての同氏について一言して見たいと思ふ。

ラッスルがこれまで世に出して居る著述によつて哲学者として如何程の人であるか。氏は認識論に於て新実在論を主張する人である。此点に於て実用主義を主張するデュエー氏とは正反対の立場に立つて居る。新実在論と云へば、実用論者[1]が知識を生活の手段と見做し、真理はすべて主観的、相対的であり、唯生活に有用なものが真理であると主張するに反し、真理は知るといふ心理作用を超越し、我々が知ると否とに関せず、真理は真理であり、従つて真理は客観的で不変的であると主張するのである。此の如き新実在論は実用主義や人本主義に反対して起つたものと思はれ、

英米に於て可なり行はれて居ると思ふ。ラッスル氏は英国に於ける新実在論者の中で有力な人であると思ふ。それでは新実在論といふものは認識論として如何程の価値を有するものか。これは無論人々の考にて異なるであらうが、私は実用主義論にも一種の意義を認めると共に、認識論として新実在論の方が正しく真理其者の性質を明にして居ると思ふ。併し私をして有体に云ふことを許さるるならば、私はラッスル氏などの新実在論には左程の期待を有するものではない。新実在論の如き考は十九世期の前半に於て既にボルツァーノがその大著「知識学」に於て明〔か〕に論じて居り、近くはマイノングの対象論やフッサールの現象学の中にも含まれて居る。又現今我国に於て多少知られて来た西南派の哲学の如き目的論的批評主義として、実用論を深くした様な所があると共に、一方に新実在論の如き考をも含んで居る。近来、独逸哲学と云へば、悪くいふのが流行の様であるが、私は此等の哲学はその基礎に於て、又その範囲に於て一層深く大きなものがあるではないかと思ふ。

ラッスル氏はライプニッツの哲学について書いたものがある。ライプニッツについては無論多くの著述があり、且つカッシーラの書いた「ライプニッツの体系」といふ如きものもあるが、ラッスルのものは氏自身の見方があり、明晰に論ぜられた良書であると思ふ。此書によつても氏の理解力の鋭利なることが分ると思ふ。私の考では、ラッスル氏の学者として動かすことのできない地位は氏の数学の哲学に求めねばならぬと思ふ。氏は「数理の原理」といふ書をかき、後にホワイトヘッド氏[2]と共に "Principia Mathematica" といふ大著述を出して居る。此方面に於ても、必ずしも氏が唯一の人とも云はれまじく、又氏の思想の基たる論理学や哲学について不十分に思はれる所もないではないが、兎に角かかる研究は従来あまり没頭した人がなく、今の所氏の著述は此方面に於ける大著たることは何人も認めねばなるまいと思ふ。

ラッスル氏の数学の哲学についてその基礎となる哲学的思想が尚一層深く大きくあつて欲しいとは、私共にすら思はれないでもないが、数学者の中にはラッスルの数学の知識を危む人もある様である。私は此点については何ともい

ふ資格はないが、デカートやライプニッツの如き偉人ならばいざ知らず、此種の仕事は双方の専門家からよく云はれないのが通常である。併し私は寧ろ此種の仕事を企てる人には、双方から同情を以て見なければならぬと思ふ。数学者がラッスルの数学の哲学の中に何か数学専門的の貢献を求めるならば、それは求める人の誤であらう。ラッスルは数学の専門家として見る人ではなからう、又其書も数学其者を書いたものではない。唯数学と論理との関係といふ如きものを論じたとしてはラッスルには兎に角独立の考があり、一角の学者であるといふことを許さねばなるまい。例へばポアンカレの如き人でも、その「科学と方法」といふ書の中に収めた「新しい論理学」といふ篇の中に特にラッスルを目当として論じて居る、[3] ポアンカレはラッスルに賛成して居るのではないが、その外の論文にもラッスルが引合に出されて居る。此種の問題を論ずる人は、氏の説を可とする人でも、否とする人でも、ラッスルなどを全然顧みない訳に行かないのである。又純粋な数学の専門書の中でも氏の書が引用せられることがある「の」ではないかと思ふ。

私は茲に数学と哲学との関係について一言したいと思ふ。数学と哲学との関係については色々の見方があるであらうが、私は昔プラトーが数学を理性の直観の一種と考へた如く、微妙なる数の関係に於て実在の純なる形相が示されるものとして、深い興味を有ちたいと思ふ、此点に於てマールブルク学派の哲学に同情を有するのである。ラッスル氏の方向は之と異なり単に数学と論理との関係を論じ、数の根本概念を説明したものである。多少余談にわたる様であるが、ライプニッツの哲学が氏の発見せる微分学と深い内面的関係があると思はれる如く、ドュニン・ボルコウスキーの「若きスピノザ」といふ書に於て云つて居る様に、デカートの分析幾何学は之によつて精神と物体との結合を計つたといふ考を面白く思ふ。デカートの哲学に於ては延長が物体の本質であつたのである。

ラッスル氏が我国一般に有名となつたのは社会改造[4]についての著述によつてであらうが、私は氏の Principles of Social Reconstruction や Roads to Freedom などは学問上の著述として価値を論ずべきものではない様に思はれる。私は唯、[5] 純学究としてのラッスルについて一言したまでである。

ラッスル氏の認識論上の考を知るに便なるものは Philosophical Essays 1910, The Problem of Philosophy などあるが、前者は絶版にて、得難い様であるから、後者を見るの外ない。後者は Home University Library の中のもので、極めて得易いものである。氏の数学の哲学については氏の前に書いた The Principles of Mathematics 1903 はこれも絶版となつて居り、Principia Mathematica の方は符号のみ多く、読み難いものであるから、氏が獄中で書いたといふ Introduction to Mathematical Philosophy がよからうと思ふ。

（『改造』、大正十年九月）

# 七　ベルグソン、シエストフ、其の他

## ——雨日雑談——

### ベルグソンについて

ベルグソンはその大著といふべき「創造的進化」を書いて以来、久しく著書を見なかつたが、三年前に「道徳と宗教の二つの源泉」といふのを新しく出した。これは氏の独創的な哲学思想から道徳と宗教を論じたものであるが、しかし本書に於てベルグソンの哲学的根本思想は別に変つて来てはゐない。

ベルグソンの哲学は直観的で云はゞ一種の経験主義的といつていい。そして実在を流動的に見て、純粋持続といふことを説く。この純粋持続に緊張と弛緩とあるといふやうなことをいつてゐる。純粋持続といふのは、ベルグソン哲学の根柢をなす考へ方で、真の実在は、いはば緊張した純粋持続、流れる時であつて、空間的世界はその弛緩したものと考へるのである。ベルグソンは空間的なるもの、固定したものを非実在的と考へて居る。道徳の世界といふのは固まつた社会と考へて、それを閉ぢた社会といふやうにいつてゐる。ところが真実在は、純粋持続の世界としてどこまでも流動して進んでゐるものである。創造的進化はこの閉ぢた社会を壊して進んで行かうとする。そこに宗教が出

て来るといふやうな考へ方である。でこの新著は、ベルグソンの形而上学の立場から、宗教と道徳とを見たものといつてよいであらう。この方面の問題はベルグソンは今まで取扱はなかつたもので、流石はベルグソンらしい深さを窺ふに足ると思ふ。学界にも将来一つの影響を及ぼすだらうと思ふ。

なほベルグソンにはごく最近、昨年あたりもう一つ本を出してゐるが、それは「思想と動くもの」といふやうな標題のものであるが、この書は初の論文を除けば大体古く書かれたものを集めたものである。

ベルグソンの思想界に於ける地位はどうかといはれると、私の考へでは、近代—といつても適確ではないが、吾々のゼネレーションに於ては、先づ最も傑れた哲学者であると、いつてよからうと思ふ。

しかし現在の哲学界思想界の大勢から考へて、つまり哲学がどういふやうに向いて行くだらうかといふ点から見るならば、ベルグソンの哲学は少くも現代の哲学の中心になつてゐるとか、或は今後の哲学がベルグソンの哲学の傾向をとつて行くといふやうには考へられないと思ふ。ベルグソンの哲学は現代の哲学や思想に非常に意味をもつてゐると思ふが中心に立つてゐる人とは私は考へない。

例へばベルグソンの哲学では創造を説いてゐる。この問題はこれから重要であらうが、ベルグソンはそれを主観から出発してゐる。現在及び今後の哲学の傾向はむしろ反対に客観的な立場をとる、客観を重んずる風な哲学がまま〳〵行はれるものと想像される。マルキシズムの哲学などは唯客観からのみ考へやうとするのであるが、それでは一方に偏する。主観即客観客観即主観の一如の創造が現代の哲学の中心問題であるといへると思ふ。が、とに角これまでよりは客観主義の方向が今後の哲学の傾向ではないかと思ふ。尤もそれは各人の考へ方があつてすべての人が同意した意見とはいへないかも知れない。

平易にいつて世界を精神から見て行くか、物質から見て行くかといふと、ベルグソンは精神を主にして見て行くので、ベルグソンのいはゆる純粋持続といふのは精神的な見方を深くつき進んで行つたものである。これに対して全く

物質的に考へる見方があり得る訳だが、私は精神と物質、主観と客観とが一つのところに真の実在の意味があると考へる。精神と物質と一つの立場といふのは、歴史的の立場といふことが出来る。一つといふのは単に精神と物質との相互関係的世界といふ意味ではない。真の実在すなはち歴史的世界は、精神的でも物質的でもないので、歴史的世界の発展として精神とか物質とかいふものが考へられるのである。ベルグソンの哲学は、その点で精神の方面に偏してゐると思ふから、現代の哲学の中心とはいへないと考へるのである。

ベルグソンの哲学が現代の哲学に、また広く欧洲思想界や文芸界に及ぼした影響は非常に大きいものがあらうと思ふ。ベルグソンは、近世のラショナリズムの傾向に対して直観主義をとり、自然科学的な実在観に対して精神的なものを実在と考へ、また空間的なものを実在と考へる考へ方に対して時間的なものを実在と考へた。ベルグソンの哲学はローマンティックな傾向が濃いといへる。

ドイツの哲学にしてもアイデアリステイックではあるが、しかしベルグソンの場合では同じくアイデアリステイックといつても非常に直覚的で、これに対してドイツの哲学はもつと概念的である。

もと〳〵フランスの哲学は伝統的に直覚的なところがあつて、感覚といふものに理想的な意味を含んでゐるのである。直覚的なものを通じて実在を考へようとするので、これはフランス哲学の特色といつていい。しかし一方には数学的なところも特色であるが、フランス語でいふサンチマンといふものを非常に深い意味に用ゐるのは、パスカルあたりから見られるフランス哲学の特色である。ベルグソンはさういふ伝統的な考へ方をずつと発展させたものである。アイデアリステイックではあるがフランスの伝統的な直覚主義が根柢となつて居る。経験論そのものを徹底して行つた理想主義といふことが出来よう。

ベルグソンの思想が、現代フランスの哲学界、思想界また文芸界に深い影響を及ぼしてゐるのはいふ迄もないことで、例へば最近日本にも紹介されてゐるプルーストなどよほどベルグソンの影響を受けた人と思はれる。その他ヴァ

レリーやアランなどの考へ方は、[6] ベルグソンのいはゆるアンチラショナリズム、非合理主義に反対して、合理主義を主張してゐるのであるが、しかし十八世紀辺の合理主義を主張してゐるのではない。ベルグソンの思想の洗礼をうけて出て来たといふ点が認められぬでもなからう。つまり反対はしてゐるけれどもベルグソンを潜つて来たとも云ひ得るであらう。前にも話したやうに、ベルグソンの考へ方は時間を主として、空間を副としてゐるが、ヴァレリーやアランなどは、空間的な考へを重んじてゐるやうに見られるが、しかしそれでゐてやはりベルグソンを通過して来てゐるのではないか。

フランス語でコル（corps）といふ語があるが、ベルグソンは流動を重んじて静的形といふものを軽んずるが、アランなどはコルを重んずる。それでコルを重んじはするがやはりベルグソンなどの考へ方を一度通つて来て、つまり単に常識的な自然科学的な考へからのコルといふやうなものでないことは明らかである。

ベルグソンは創造とか時とかいふことをしきりにいふが、創造されたものが即創造するものであるといふことを余り考へてゐないと思ふ。つまり客観的なものが考へられてゐない。アランなどの考はコントの外によつて内を制するといふ考によつてベルグソンに反対すると思はれるが、反対するだけ逆にベルグソンの影響は働いてゐないとは云はれない。

日本では周知のやうに約二十年前にベルグソンが流行のやうに読まれ騒がれたことがあつて、私なども一時没頭したこともある。日本では何時でも一時の流行現象のやうに思想界の表面を擦過して行く観があつて、ベルグソンなども日本の思想界に果してどれだけ痕跡を残したか疑はしい。従つてベルグソンの哲学から何か具体的に指摘出来るやうな影響が日本の思想界にあるかどうか分らない。かういふ傾向は日本哲学の発達の上に非常に歎かはしいことだと思ふ。もつと物事の奥深く入りこむことをしないでは新らしいものが生れ出ることを期待出来ない。

元来ベルグソンの思想は日本人の考へ方に非常に結びつくところがあるやうに私は思ふ。その直覚的で流動的な考

へ方は日本人の気分と一脈結びつき易いものがあるやうに思ふのである。少し横道かと思ふが、日本ではまだ本当にフランス哲学といふものを研究して来なかつたやうに思ふ。これは日本の哲学界が最初には英国を学び、やがてドイツ哲学が中心になつて今日に及んだので、フランス哲学につくことが少なかつたのである。しかしフランスの哲学は、英国の哲学ともドイツの哲学とも違ひ、前にいつたやうな伝統的な特色をもつてゐるので、も少し研究されていいやうに私は思ふ。直覚的で、内的知覚を重んずるといふやうな特色は、ドイツの哲学や英国の哲学よりも日本人には共通的なものがあり、向くのではないかと私は思ふ。

## 唯物論の哲学について

唯物論の哲学、つまり今日のマルクスの哲学は、いはゆる歴史哲学だが、勿論従来のものとは新らしい意味をもつた歴史哲学である。従来の歴史の考へ方は[7]アイデアリステイツクな考へ、即ち主観的な根柢に立つてゐたが、マルクスでは物質的の立場から、即ち客観的に見る点に特色がある。今後の哲学は大体歴史哲学の方向にあると思はれるが、唯物史観も勿論その方向にある。

たゞ唯物史観には客観主義に偏したと思はるゝ点が不完全であるといひ得る。歴史にしても、主観でもない客観でもない一つのもの、弁証法的実在とでもいつていいが、[8]さういふものの一つの発展として見るべきであると思ふ。しかるにマルクスの哲学は物質の一方面からのみ見てゐる点がある。マルクス哲学の物質は単なる自然科学でいふ物質ではなしに、弁証法的の物質であるといはれてゐるが、それでゐて依然自然科学的な物質観に囚はれてゐると思はれる。弁証法的物質がどういふものかといふ点に至るとまだ研究が不十分だと思ふ。物質の概念が本当にまだはつきりしてゐないと思ふ。マルクスのいふ物質の考へ方から弁証法が出て来るのではなく、主観が客観を限定し、客観が主観を限定するといふところに本当の弁証法があるのである。

マルクスは科学によつて弁証法を考へるやうにいふが、科学の発展もまた歴史的に考へらるべきものだから、無論弁証法的発展の形をとるけれども、具体的なるものを抽象化することによつて科学の法則が考へられるのであつて、科学によつて弁証法を証明することは不可能だと思はれる。自然と歴史との関係に於ても、マルクス哲学では自然を弁証法的に考へてゐる。例へばエンゲルスの書いた自然弁証法の如きもそれである。私は自然といふものはやはり歴史的なものとして考へなければならないと思ふ。自然と歴史とは一つにならなければならないと思ふ。併しそれを単に自然科学的に見た自然の考へ方からは、自然弁証法を考へることは出来ない。さういふ点の考へはエンゲルスに於ては不十分である。自然と歴史とはただ一つだといつてゐて、その意味が深くは考へられてゐないやうに思ふ。

マルクシズムでは実践といふことをいひ、実践によつて知識は基礎づけられるといふやうにいふが、しかしその時の実践といふのは単に物質だけからは考へられるものではない。行動とか実践とかいふことも、もつと深く考へて行かなければならないと私は思ふ。

とにかく唯物論といつても深く考へて行くと、唯物論だけでは解決出来ないものがあると思ふ。細かく議論をすれば中々やかましい問題で、以上のやうな話では餘り簡単に過ぎるが、どうもマルクス主義の人はこつちのいふことを理解しようとしないで、何事も速断してただ攻撃するだけに力を注ぐやうな傾きのあるのはどうかと思ふ。

## シエストフについて

最近日本の読書界でシエストフの思想についてしきりに問題にされてゐるやうであるが、私もこの人の書物を読んで見た。シエストフは中々広く書物を読んでゐる人のやうで、哲学の方面でも希臘哲学などにも造詣が深いやうで相当の理解をもつてゐることが解る。しかしいはゆる哲学の専門家といふのではなくて、むしろ思想家といふべき部類に入る人であらうと思ふ。この点ではベルグソンなどと同列に於て見ることは無理だと思ふ。

シエストフは近代の合理主義的考へ方には徹底的に反対するのが特長で、人間中心に理性的に考へることを一切否定せんとしてゐる。マルクシズムも一面から人間の理性を否定するところがあつてシエストフの考へ方に通ずるところがあるやうだが、しかしマルクシズムは人間のアイデアリステイツクなものを否定するけれども自然科学的なものを基礎とする点では勿論肯定の上に立つてゐるが、シエストフになると絶対的の否定といつた形で、合理的な何ものの基礎にも立つてゐないやうに見えるのである。

シエストフは人間の生きて行くことは死ぬことである、吾々の普通にいふ生命といふのは真生命ではない、それは死である、真の生命といふものはかゝる生命を否定するところにある、といふ風なことをいつてゐるが、かういふ点はむしろ宗教的であるといへる。それはかの弁証法的神学に非常によく似通つたものがあると思はれる。十六世紀以来、ずつと学芸も道徳も、宗教までも、人間の理性を中心にして考へて来たと見れるが、シエストフはさういふ考へ方を絶対に否定し去るのだから、あとには宗教的な立場が残されるだけではないかと思ふ。

彼はかくして一切のものを否定するだけで積極的な面は何も見せてはゐない。否定し否定してさてどこへ行くといふのか、その道は指示しないのである。かういふ考へ方から少しでも積極的にならうとすれば、それは前いつたやうに弁証法的神学でも考へる外ないやうに思ふ。

ニイチエの思想も普通のいはゆるアイデアリズムや合理主義を徹底的に否定してゐるが、しかし彼は個人主義的思想に徹した超人思想をかゝげてゐる。マルクシズムも前いつたやうにニイチエと同じやうに否定するけれども自然科学的の知識を根本に考へるので。人間の知識を否定するといふのではない。ところがシエストフや弁証法的神学といふものになると、超人を認めるわけではなく、自然科学的知識も否定し、吾々の社会を構成してゐる一般的の法則を否定し、歴史的に発展して行く理性的なものをも否定し、何物をも否定する特色をもつてゐる。弁証法的神学ではかういふ風に否定し去つたところへ神を持ち出して来るのであるが、シエストフはそちらの方をはつきりいつてゐるわ

けではないが、つまりさうなるだらうと思ふ。その点はロシヤ人の気分がよく出てゐるやうに思はれる。革命前のロシヤに育つた人として、国家に対し社会に対し学問に対し宗教に対し、其の他一切のものに対して暗い絶望に包まれて、拠りどころをもたない気持がシエストフの思想の基調をなしてゐるのではないかと思はれる。

日本でインテリ階級がシエストフを迎へる気持、彼の思想に共鳴するといふやうな傾向を見出すとすれば、それはやはり日本の現在の社会状勢といつたやうなものに、彼の思想に動かされる何ものかがあると見ていいであらう。その点からいつて彼の思想は現代思想の一面を現はしたものと見れぬことはない。

## 東洋思想と西洋思想

東洋思想と西洋思想、この問題は私の始終考へてゐることだが、この両者の間にはどうも根柢的な違ひがあると思ふ。自然科学の方面は大体一般的で差違がないが、それでも西洋で自然科学界に貢献した英国とか、フランスとか、ドイツとかについて、物理学や数学にもドイツ的、フランス的、英国的といふやうな差異があるといはれたりする。けれども科学上の真理には東洋西洋とか或は各国の国民性といふものによつて差異はないわけである。ところが所謂精神科学の方面になると、なか〳〵さうはいかない、いかない所に精神の特色がある。一軒の家を建てるに石屋や大工や左官やいろ〳〵寄り集つて出来るやうに精神科学はいろ〳〵の見方が綜合されて全体となつて進んで行くもので、国民性の差異から、或は歴史伝統の差異から、それ〴〵非常に特色が出来てゐる。吾々東洋人は東洋的に考へ、もつと狭く日本人〔と〕してはどうしても日本的に物事を考へることになる。さうならなければならなくなつてゐるのだと思ふ。

この頃の日本主義を唱へる人の中には非常に排他的な傾向の人があるが、単に日本だけが孤立してゐるものと考へないで、日本といふ立場から世界的に考へて行くといふ風でなければならぬと思ふ。これはしかし口でいふのは簡単

だが、実際に当つた場合はむつかしいものである。

例へば私は法律のことはよく解らないが、西洋の法律はローマ法以来ずつと発展して来て、一つのシステムとして動かし得ないやうな生えぬきのものになつてゐる。明治になつてから西洋の法律を取り入れて日本でも色々の法律を制定して来た。ところが日本の昔からの国家に対する考へ方と、西洋のあの系統立つた法律思想に培はれた国家観とは異なつたところがある。西洋の国家社会に適合して出来てゐた法律を持つて来て、違つた社会観国家観に馴れて来た日本の法律に適用した形だから、何か根本的にしつくりしないものがあるのでないかと思ふ。西洋の法律に日本の特殊な伝統的なものを織り込んで見たとしても、つぎはぎの感じは免れぬだらうと思はれる。さういふことをした為に却つて全体が壊れるといふやうなことさへ起り得ると思ふ。

よく西洋哲学と東洋哲学とを比較して、外面的に似よつた点を見つけて喜んだり、儒教の思想が日本に於て実現せられたと考へる様な人もあるかも知れないが、いかに同じ様に見えても本当は違つてゐるところがあると思ふ。鯨は形などからは魚に見えるけれども動物学者から見れば魚ではないやうなものである。

かういふ理由からは、今後日本人は西洋思想をもつと根柢まで掘り下げて考へて、その根柢から何かを掴んでそこから動いて行くといふやうにならなければならぬだらうと思ふ。しかしこれは一朝一夕に出来ることではないだらう。西洋の技術方面などは今日の日本ではよく咀嚼されて理解も応用も自由に出来る状態だが、思想の方面はよほど考へて見る必要があると思ふ。基礎的な研究をやつて行く必要があると思ふ。それでは今の間に合はないといふかも知れぬが、間に合はなくてもやつて行かなければならないと思ふ。

法律のことなどでも問題の起るのは、かういふ根本問題の研究の不足に基因してゐるのではなからうか。とにかく法治国として法律といふものを取り入れた以上、それを日本的に消化するには、法律といふものの根本概念から深く研究して行かなければならぬと思ふ。法律哲学の研究が必要と思ふ。さういふ方面の研究はこれまで疎かにされてゐ

るではなからうか。論理的に厳密な体系として歴史的に発達したものの何処かに簡単に他の原理を入れるということは容易なことではなからうと思はれる。

学問は道具などとは違つてその中心は生きたものをもつてゐる。西洋の学問をもつて来て、伝統の全く違ふ東洋に生かさうとするには、学問の生命をまで変へて使はなければならぬと思ふ。簡単に道具のやうに結び合せるといふことは出来るものでないと思はれる。

## 知識階級について

知識といふものはその時代に即したもので、全然歴史的時代を離れての知識といふもののないことは云ふまでもない。又狭く云へば学問も民族に即するとも云ひ得るであらう。さらばと云つて学問は党派や主義の宣伝機関ではない。この頃はかういふ考の人が多い様である。学問には深い鋭い分析を第一とする。実在そのものをして語らしめねばならぬ。感情的な信仰や始から或目的を以て組立てるのでは学問にならない。学問は時代に即すると云つてもその時代の種々なる方面を綜合統一し、時代に即しながらも時代を越え、全体的に物を見て行く所に学問の用があるのである。そこに知識階級の存在理由があると思ふ。知識階級は弱いものだが、研究の自由が極端に抑圧せられる所には進歩発展はないであらう。真の知識階級といふのは一派の道具に使はれるものではなくして一派を指導すべきものである。斯く云ふも、真理は抽象的普遍にあるといふのではない。真の理性は却つて個性的なものでなければならない。

思想の自由と、自由主義とをすぐ同一のものゝやうに考へてゐる傾があるやうだが、これは誤解である。自由主義は個人主義といふのと同じで、欧洲で十八世紀頃に生れた思想である。その時代に即して考へ出されたものであると思ふ。思想の自由、研究の自由を主張することは、自由主義を主張するといふのとは同じでない。

# 行動主義について

近代の文学は大ざつぱに分ければ、理想主義と自然主義といふ様なものであり、後者の中に個人の心理を描く主観的方向のものと、も一つは社会的な面を描く客観的方向のものとあるといふことができるでもあらう。之に対し近頃行動主義といふものが起つたのは時代精神として興味があることと思つてゐる。

マルクシズムなどのやうに徒らに主観を排して唯客観といふだけではいけない。さらばと云つて唯主観的だけでもいけない。前にいつた如く、真の実在は客観が主観を限定し主観が客観を限定し、主観的—客観的、客観的—主観的として、云はば歴史的である。行動主義の根柢は此処になければならぬと思ふ。この意味に気づいて初めて行動主義は生きて来るものだらうと思ふ。行動といふことを今いひ出したのは目のつけ所は面白いと思ふが、併し一歩深く行動をどう考へるか、どう摑むかといふことになると、まだ不十分のやうに思ふ。

現在といふものを単に吾々の心理現象として、摑むのでなく、また単に科学的に摑むといふのでもなく、我々が現在かうしてあるといふことは、歴史的にあるので、歴史的存在、歴史的事物である。併し私が此処に歴史的といふのは、普通に人が歴史的といふ語によつて考へる様な意味に於ての歴史的といふのではない、単に過去の歴史からといふ意味ではない。主観客観を包み主観的—客観的に自己自身を限定する創造的なるものを意味するのである。限定するものなき限定を意味するのである、過去未来を包む現在の自己限定をいふのである。真の歴史的実在といふものはかゝるものでなければならない、即ち真の具体的実在でなければならない。それは単に主観的立場から割り切れるものでもなければ、単に客観的立場から割り切れるものでもない。かういふ立場から人生を摑んで行くところに、本当の行動主義があると考へる。

過去の歴史を考へるといふ事も現在から考へるのである。其事自身が亦歴史的現在に於ての歴史的出来事である。

過去、未来は現在の自己限定から成立する。併し此等の事は今此処に詳しく説けない。

行動は生物学的な衝動といふやうなものではなく、さらばと云つて単に心理的でもない。それを生物学的な衝動に近く考へるとゾラのやうなものになると思ふ。ゾラの文学態度は科学的自然に偏したものと思はれる。それと反対にプルーストの如きは、心理的な立場に立つと見られると思ふが、しかしプルーストのは単に古い心理主義の小説ぢやなく、あれから尚一歩具体的となれば行動主義に結びつくのではないかと思ふ。

兎に角、本当に深い芸術家といふのは、現在を真に具体的に私の所謂歴史的に把握した人であるといふことになると思ふ。この意味が深く分らなければ、行動主義の意味も本当に分つたとはいへないと思ふ。

（本稿は二月末の雨の一日、鎌倉の寓居に博士、雑問に答へられたのを綴つて校閲をうけたものである――『改造』編者）

（『改造』、昭和十年四月号）

〔編輯者注〕

（1）原文は「……実用論者か」（2）原文は「……ホワイト・ヘッド氏」（3）原文は「……論して居る、」（4）原文は「……有名となった社会改造」（5）原文は「……私に唯、」（6）原文は「……などの考へ方には」（7）原文は「……従来の歴史の考へ方には」（8）原文は「……とでもいっていいか、」

なほ、（ママ）は原文のままであることを、〔　〕は編輯者の追加であることを示す。

哲学研究　第五百五十四号



# 解　題

大橋良介

雑誌『改造』所収の西田幾多郎博士の論文「私の主意主義の意味」（大正十一年九月増大号）は、すでに本誌五百五十一号に収載された。その後の調査で、『改造』誌所収の諸稿中、さらに三篇が「全集未収載遺稿」であることが確認された。このうち本誌収載の二篇の、『改造』誌への掲載年月は次の通りである。

一　「学者としてのラッスル」……『改造』、大正十年九月号

二　「ベルグソン、シェストフ、其の他――雨日雑談――」……『改造』、昭和十年四月号

「一」については、『改造』誌では表題の前にさらに大きな活字で「ラッセル教授の印象」という題が付せられている。しかし題字の組み方や本文の内容からみて、これは雑誌編集者が読者向けに付したものと推定される。なお、西田博士の「日記」には、博士の折り折りの講演出講や論文執筆等については、たいていはそれらに該当する記事が見出されるが（且つ、これらの記事が「全集未収載遺稿」探索の一つの手がかりとなるのであるが）、「一」に関する記事は筆者には見出されていない。

「二」については、昭和十年二月二十六日の日記に「改造社員来り談話筆記。編輯長鈴木一意」とある。本文の副題にある「雨日雑談」とは、これに当たるであろう。

右の二篇の他に、『改造』誌所収の第三の「全集未収載遺稿」として左記のものがある。

三『改造』発刊二十周年に際して」……『改造』二十周年記念号、昭和十三年四月号

西田博士の「日記」昭和十三年三月四日の記事「改造へ原稿送」が、この小文に当たるであろう。内容は特に哲学に関するものではないので、本誌では所在の報告にとどめる。

これまで本誌上に報告してきた「全集未収載遺稿」は『智山学報』と『改造』に所収のものであったが、この他にも大正五年

に信州の各地で三日間にわたってなされた西田博士の講演「現今の唯心論」、「現代哲学に於ける科学的真理の概念」、「現今の理想主義」、さらには昭和十四年二月刊行（非売品）『西田幾多郎先生講述・哲学の基礎問題』（編輯兼発行者、長坂利郎）(注)所収の「信濃哲学会」講演筆記七篇のうち、「プラトンの哲学」と「コーヘンの哲学」の二篇、西田幾多郎の少年時代の作になる漢詩・漢文十数篇等が、全集未収載の主なるものである。これらも所在確認の報告にとどめ、本誌への収載は予定していない。

本誌五百五十一号での「解題」に少し触れたように、全集未収載の小文や書簡の類いもかなりの数にのぼり、幾人かの協力を得てまだ調査を続行中である。それについての詳しい報告は、近刊『西田哲学――新資料と研究への手引き』（共編著）での解説に譲り、本誌上を借りての筆者の報告は本号をもってひとまず終わりとする。

（注）この『哲学の基礎問題』は、全国の主な図書館の中では国会図書館にのみ登録カードがあり、しかも現物は存在しない。この「幻の書」を提示して頂いた長野県佐久市の吉岡正幸氏（氏は曽ての「信濃哲学会」のメンバーでもある）と、同氏をご紹介下さった東北大学教授・上妻精氏とに厚く御礼申し上げる。

（筆者　おおはし・りょうすけ　京都工芸繊維大学工芸学部〔哲学〕教授）